

知的障害者施設での聾重複障害者への
コミュニケーション支援におけるかかわり

橋本朱音・甲斐更紗・吉村京子
二神麗子・木村素子・金澤貴之

群馬大学教育実践研究 別刷
第37号 195～203頁 2020

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

知的障害者施設での聾重複障害者への コミュニケーション支援におけるかかわり

橋本 朱音¹⁾・甲斐 更紗²⁾・吉村 京子³⁾
二神 麗子²⁾・木村 素子⁴⁾・金澤 貴之⁴⁾

- 1) 群馬県立渋川特別支援学校
- 2) 群馬大学教育学部障害児教育講座 (日本財団事業)
- 3) (前) 社会福祉法人ゆずりは会
- 4) 群馬大学教育学部障害児教育講座

Communication Support Activities for Deaf Persons with Multiple Disabilities in the Facility for People with Intellectual Disabilities

Akane HASHIMOTO¹⁾, Sarasa KAI²⁾, Kyoko YOSHIMURA³⁾
Reiko FUTAGAMI²⁾, Motoko KIMURA⁴⁾, Takayuki KANAZAWA⁴⁾

- 1) Gunma Prefectural Shibukawa Special Needs School
- 2) Department of Special Education, Faculty of Education, Gunma University (The Nippon Foundation Project)
- 3) Social Welfare Juridical Person Yuzurihakai (previous workplace)
- 4) Department of Special Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：聾重複者、コミュニケーション支援、非言語的手段の活用
Keywords : Deaf Persons with Multiple Disabilities, Communication Supports,
Use of Nonverbal Communication

(2019年10月31日受理)

1 はじめに

1.1 聾重複の問題

山口 (2005) は、「聴覚障害は、情報障害と対人とのコミュニケーション障害を伴う。人とやり取りするための手段として手話・指文字・身振りなどの視覚的言語を使用するが社会的にごく一部の人にしか通用しないという特性があるため、結果として社会的孤立や情報からの隔離を生じさせてしまうこととなる。聴覚障害と他の障害を併せ有する重複聴覚障害者の場合、その傾向は顕著である。」と述べている。

このことから、聾重複障害は聴覚からの情報が入らないため、コミュニケーション等様々な場面で制約のある聴覚障害と、対人関係の構築や他者との意思疎通が困難である知的障害等が併せさるため、数々の障壁が生じてしまう障害であることが考えられよう。

1.2 聾重複障害児者とのコミュニケーション

そのような障害を有する聾重複障害児者 (以下、聾重複者) へのコミュニケーション支援では「人との関わりや興味関心の向く体験を拡げ、非言語的なコミュニケーションを基盤として、発達に応じて言語的コ

コミュニケーションを加えていく」、「手話によるコミュニケーションを基本とすることによって、(中略)人との関わりが広がる」(日本の聴覚障害教育構想プロジェクト委員会, 2005)ということが求められている。

また、聾重複者とかかわるにあたっては、「柔軟性をもって個別化したコミュニケーション・チャンネルを探すこと」「表現すれば呼応する対象があるということ」「人は交流できる存在であるという手応えをいかに提供できるか」ということが重要である(並木(福田)・横山・西沢・山口・村瀬, 2000)。

1.3 聾重複者とかかわる「かかわり手」のコミュニケーションスキル

聾重複者の就労・生活の場として、手話等によるコミュニケーションで様々な経験が共有できる場が必要という聾重複者をもつ親たちの思いから、全国各地に聾重複者のための作業所・施設が作られた。しかし、それらの作業所・施設の数に限られており、遠方であれば通所ができないため、知的障害者が多く利用する施設等を利用している場合がほとんどである。

知的障害者が多く利用する施設等には手話スキルや聾重複者とかかわりについての知識等を有している支援者が必ずしもいるとは限らない。また、聾重複者とかかわりの経験がある相談支援専門員等の支援者の半数ほどが、手話スキルや聾重複者とかかわりについての知識等が十分でないために、手探りで聾重複者とかかわっている(甲斐・金澤・二神・吉村・木村, 2020)現状がある。

知的障害者施設の中に聾重複者が利用者としていかに過ごしやすいコミュニケーション環境を構築するか、どのようにコミュニケーションを図るのかを考える必要がある。

以上の問題意識に立脚し、まずは知的障害者施設では聾重複者とどのようなかかわりをしているのか、広く事例を収集して整理することが求められよう。

2 目的

本研究では、知的障害者施設に通所している聾重複者である利用者(以下、聾重複者利用者)を対象とし、聾重複者と施設職員との間にどのようなコミュニケーション状況が展開されているのかを把握するとともに、聾重複者へ

のコミュニケーション支援における施設職員のかかわり方について検討することを目的とした。

3 方法

3.1 期間

2018年11月12日～16日、12月6日

3.2 対象者

対象者は表1の通りであった。本研究の対象であった、知的障害者施設(障害福祉サービス事業所の就労移行支援と就労継続B型の機能をもつ)では、聞こえる人(以下、聴者)である職員数名と聾者の職員1名が聾重複者利用者数名とかかわっていた。聴者の職員たちは簡単な内容の手話表現ができる。利用者である聾重複者は聾学校で教育を受けた経験を持っており、日常生活での主なコミュニケーション手段は手話、口話であった。

表1 対象者について

対象者
(1)聾重複者
Aさん(聴覚障害と他の障害を併せ有する)
Bさん(聴覚障害と他の障害を併せ有する)
Cさん(聴覚障害と他の障害を併せ有する)
(2)聾重複者とかかわる人々
Y職員…聴者の職員
W職員…聴者の職員
V職員…聴者の職員
T職員…聴者の職員
Dさん…聞こえる利用者 (聴覚障害以外の障害を有する)
Eさん…聞こえる利用者 (聴覚障害以外の障害を有する)
Fさん…聞こえる利用者 (聴覚障害以外の障害を有する)

3.3 手続き

作業中での職員の指示の出し方や、聾重複者利用者と職員との1対1の対話を中心とした場面をビデオカメラで撮影し、職員がどのように聾重複者利用者とかかわっているのかを調査した。収録した時間は計19時間であった。ビデオ撮影で収録した映像内容について、音声、手話・指文字・指さし等、行動を表2のように分けて文字に書き起こしして、分析のための記録とした。また、それぞれのエピソードの中で特徴的な

かかわり方と考えられたところについて【 】をつけている。なお、個人が特定されないように、固有名詞等は〇〇、△△などの記号に置き換えている。

表2 表記内容

記号	内容
「 」	音声
()	手話・指文字・指さし等
/	手話単語の区切り
//	手話による発言の終了
PT 1	一人称を表す手話単語
PT 2	二人称を表す手話単語
PT 3	三人称を表す手話単語
[]	利用者や職員の行動

3.4 分析

得られた記録から、聴者の職員と聾重複者利用者とのコミュニケーション状況に関すると思われる記述（エピソード）を抽出した。特にミスコミュニケーション（発信者の意図と受信者の意図が違う）とそれに伴う修復状況、コミュニケーションが成立している時の職員のかかわり方、コミュニケーションがされていない状況等の場面に着目し、それらにかかわる聾重複者利用者と職員との一連のやり取りを1つのまとまりのあるエピソードとした。計8個のエピソードが抽出された。

なお、記述にあたっては、聾重複者利用者の年齢、障害の状態、性別等を区別しなかった。理由は、いずれの聾重複者においても年齢や性別による大きな違いがみられなかったことによる。障害の状態によるコミュニケーション状況や聾者である職員とのかかわりについての分析は別の機会に検討したい。

3.5 倫理的配慮

倫理的配慮にあたって、研究の目的・方法、個人情報保護について文書と口頭（手話等も含める）で説明し、同意を得た。

4 結果と考察

4.1 ミスコミュニケーション状況が生じた時の職員のかかわり方

(1) エピソード1

エピソード1はY職員と聾重複者利用者Aさんの1

対1のかかわりである（図1）。Aさんがたたもうとして引張ったタオルが破れた音にY職員が気づき、AさんはY職員を見た。Y職員は破れたタオルを（Y職員のところに）持ってくるように言った（①）が、Aさんは違うタオルを持った（①-2）。Y職員は違うと言った（②）が、Aさんは違うタオルを持った（②-2）。そのため、Y職員はAさんの近くに行き（③）、破れたタオルを捨てると言った（④）。それによって、Aさんは破れたタオルを捨てる（④-2）ということが分かったという場面である。

〈場面〉利用者がタオルをたたんでいる。Aさんがたたもうとして引張ったタオルが破れてしまう。
Aさん：[タオルを引張ったら破れてしまった。]
Dさん：[タオルを見る。]
Y職員：[音でタオルが破けたことに気付く。]
Aさん：[Y職員を見る。]
Y職員：(破く/PT 3 (タオル) /もらう/下さい/ PT 3 (タオル) //) …①
Aさん：[たたんだタオルを持って行こうとする (Y職員を見ながら)] …①-2
Y職員：(違う/四角/PT 3 (タオル) //) …②
Aさん：[違うタオルを持つ。] …②-2
Y職員：[Aさんの近くに行く。] …③
Aさん：(破く/しまった/しまった //) [破れたタオルを持つ。]
Y職員：(PT 3 (タオル) /捨てる/PT 3 (ゴミ箱) //) …④
Aさん：(捨てる) …④-2
Y職員：[破れたタオルを持って行く。]

図1 Y職員とのかかわりにおいて (1)

最初、Y職員が手話やジェスチャーを交えながら指示していたが、Y職員が指さしたものとAさんが持ったタオルが違っていった（②、②-2）というミスコミュニケーションの状況が生じた。そのため、Y職員は③のようにAさんの近くに寄るといった【対人距離の調整をする】といった方法を取り、もう一度指指示を出した。それによって、Aさんは自分に直接言っていると、Y職員の指示内容がAさんに伝わったということが窺えた。そこでミスコミュニケーションが修復されたと考えられた。

(2) エピソード2

エピソード2は、多数の利用者がいる中でのY職員と聾重複者利用者のかかわりである（図2）。作業が

終わっていない利用者たちがいる中で、Aさんが先に片付けようとしていて、Y職員がその様子を見つけた。AさんがY職員を見たときに、Y職員は音声と手話で話をし、終わっていない人を指さした(⑤)。Y職員が指さしたところをAさんは見る(⑤-2)。そして、Y職員は見渡して(⑥)、指示を出し、Aさんは片付け始める(⑥-2)という場面であった。

〈場面〉まだ(作業が)終わっていない人がいるのにAさんが片付けようとしている。
Y職員：[Aさんが片付けようとするのを見つめる。]
Aさん：[Y職員を見る。]
Y職員：「まだ、まだ。」(まだ/まだ//)
[終わっていない人を指さす]…⑤
Aさん：[見る。]…⑤-2
Y職員：「OKかな?みんな。」(OK)
[見渡す。]…⑥
「じゃあ集めてください」(集める/集める//)
Aさん：[片付け始める。]…⑥-2

図2 Y職員とのかかわりにおいて(2)

作業が終わっていない人たちがいるが、Aさんは片付けようとしていたことから、周りの状況がAさんに伝わっていない可能性が考えられた。そして、そのような状況が起きたことにY職員は気づいたことで、【特定のものを見るように促す(具体物・具体的な人物への指さし)】という、⑤の内容の非言語的行動が出されたことが窺えた。⑤によって、AさんはY職員が指さしたところをみた(⑤-2)ということから、同じものをみるという共有体験が生じたことが考えられた。手で(OK)という手話表現を出した状態のまま利用者全員に見えるように配慮していた場面がみられ、見渡すという確認(⑥)をしたことで、Aさんも片付け始める(⑥-2)という行動が出てきたため、伝わっているのだと考えられた。そのため、他の利用者と同じタイミングで片付け始められたことが窺えた。

(3) エピソード3

エピソード3は多数の利用者がいる中でのV職員と聾重複者利用者Aさんのかかわりである(図3)。Aさんが乾燥室から違うラックを持ってきており、V職員が「△△はやらない」と音声で言い(⑦)、他の障害を持つ利用者たちは「〇〇ですよ?」と確認した

り、ラックを元の位置に戻したりしていた。V職員は音声で話していたが、Aさんの近くに行き手話で説明をする(⑧)という内容であった。エピソード2と類似している場面である。

〈場面〉たたんでいたものが終わったため、Aさんが乾燥室から違うラックを持って来た。
Aさん：[ラックを運ぶ]
Eさん：「待って、待って」
[Aさんの前に行き、ラックを止める]
V職員：「何やってるの?△△はやらないんだよ。」…⑦
Dさん：「V職員、〇〇ですよ?」
Aさん：[ラックから離れる]
Eさん：[ラックを元に戻す]
V職員：「〇〇だよ、△△はいい。」(手を横に振る)
「〇〇やらなきゃ。」
[Aさんの近くに行く]
「これは木曜日。」(木曜/木曜//)…⑧
Aさん：(木曜)…⑧-2
V職員：[〇〇のラックを指さす]
「これは今日」(PT 3(ラック)/今日//)

図3 V職員とのかかわりにおいて(1)

⑦でV職員が「△△はやらない」と述べていたがそれが伝わっておらず、Aさんはどのものを何曜日に畳むのか分かっていなかったため、今日中にたたむべきものが入っているラックではなく、別の曜日にたたむものが入っているラックを間違えて持ってきてしまったというミスコミュニケーションの状況が生じたことが考えられた。何をするのか、どれをたたむのか職員はその都度指示をする必要があると考えられた。⑧でV職員がAさんの近くに行くといった【対人距離の調整をする】ということを行い、手話で「これは木曜日」ということを伝えることで、⑧-2で、Aさんは(木曜日)と手話を表出し、本来たたむべきものを確認することができたことが窺えた。V職員が【対人距離の調整をする】ことで、1対1の空間が生まれ、ミスコミュニケーションが修復されたといえよう。

4.2 コミュニケーションが成立している時の職員のかかわり方

(1) エピソード4

エピソード4はY職員と聾重複者利用者Cさんの1対1のかかわりである(図4)。玉ねぎの苗を植える

(2) エピソード6

エピソード6はV職員と聾重複者利用者Aさん、他の利用者とのかかわりの場面である(図6)。作業内容について、V職員と他の障害がある利用者Eさんの間に会話がされており、⑬はたたんだタオルをどこに持って行くのか、という重要な指示が音声で交わされていた。⑬の指示内容に基づいて、V職員は持って行くところを指さした(⑬-2)。Aさん以外の他の利用者は「こっちに」というV職員の言葉を聞いてV職員の方を見る(⑭)といった内容で反応していた。さらに、V職員は「違うところ持って行くと混ざっちゃうからね。」と伝えていた。

〈場面〉たたんだものを他のものと混ざらないようにV職員が指示する。
 V職員：[Eさんと一緒に乾燥室からラックを持って来る。]
 Eさん：「次、○○!○○!」
 V職員：「はい、じゃあ○○ね。□□と混ざらないようにこっちに持ってきてね」…⑬
 [持って行くところの机を指さす]…⑬-2
 Aさん以外の利用者：[V職員の方を見る]…⑭
 V職員：「違うところ持って行くと混ざっちゃうからね。」

図6 多数者の中でのV職員とのかかわりにおいて(1)

このエピソードから、指さしをしても、聾重複者利用者さんAが指さしを直接見えていないと分からないのではないことが窺えた。

(3) エピソード7

エピソード7は帰りのミーティングの様子である(図7)。他の障害がある利用者が進行表の紙をめくっていて、T職員が利用者に向かって「今日頑張った人ー?」と音声で問いかけていた。その場にいた聾重複者利用者Aさん、Bさん以外の他の利用者は「はい」と返事をするといった反応を示していた。しかし、⑮にあるようにAさんとBさんは自分の準備をされていて、問いかけがあったことに気付いていないようであった。その後、前を向くというのがあった(⑮-2)。

〈場面〉帰りのミーティング。

Fさん：[進行表をめくる]

T職員：「はい、今日頑張った人ー?」

Aさん・Bさん以外の利用者：「はい!」

Aさん・Bさん：[自分の荷物の整理をされていて問いかけに気付いていない]…⑮

T職員：「報告はあるかな?Fさん、聞いてきて。」

Fさん：(事務室に行く)

Aさん・Bさん：[前を向く]…⑮-2

図7 帰りのミーティングでの様子

エピソード5、エピソード6、エピソード7とも集団の中でのやりとりであり、職員と他の障害をもつ利用者のやりとりを聾重複者利用者が理解することの難しさが垣間見えた。

集団の中で重要な指示・その場で考えた指示を伝えたいときは、聾重複者たちと目を合わせる等の個別対応をすることが必要になってくるのではないかと考えられた。

4.4 コミュニケーション成立と成立していない状況の混合

エピソード8は、はW職員と聾重複者利用者Aさんの面談場面でのかかわりである(図8)。W職員が実習先から言われたことをAさんに説明しようとしている。⑯では、W職員がAさんに紙を見せ、Aさんが紙を見ているのにもかかわらず、話し始めている。⑰では、W職員も手話を使い始めたが、(会社)と手話で表現した後は、紙に書かれている内容を指でなぞったり、音声で話したりした。その後、会話が続いている。⑱で、W職員が「身だしなみ、整えましょう。」と言ったら、Aさんは手話で(髪/床屋)という内容を表現していた。それがW職員に伝わっていないのか、W職員は「昨日は?」と問いかけていた(⑱-2)。Aさんは(床屋/ない/床屋/とこや(指文字)/行く/髪/切る/床屋//)と手話で話していて、W職員は「あー」と反応していた(⑱-3)。そのあと、Aさんが手話で話していて、W職員は「うん。」という反応を出していた(⑱-4)。⑲で、W職員がホワイトボードに書いてもらうよう、Aさんをお願いしていた。そして、W職員がホワイトボードに書いてAさんに見せるという行動が見られ、その行動が2回生じた(⑲-2、⑲-3、⑲-4、⑲-5)。

〈場面〉実習先から言われたことを面談でAさんに伝える。

W職員：(よろしく)

Aさん：(よろしく／お願いします／)

W職員：「昨日会社に行ったでしょ」(昨日／会社／PT 1／行く／)

[下を向いて紙を見る]

「そのときに……」

[紙をAさんに見せる。]

Aさん：[紙を見る。]

W職員：[Aさんが紙を見ているときから話し始める。]…⑩

「Aさんの仕事、会社での約束事」(Aさん／仕事／会社／)…⑪

「1つ」(指で1)

[紙をなぞる]

「身だしなみ、整えましょう。」…⑫

Aさん：(髪／床屋／床屋／床屋／髪／床屋／床屋／)

W職員：「昨日は？」(昨日)…⑬-2

Aさん：[頭を触る]

(床屋／ない／床屋／とこや(指文字)／行く／髪／切る／床屋／)

W職員：「あー」…⑬-3

Aさん：(切る)

W職員：「切るの？」(切る)

Aさん：(切る)

W職員：「ちょっとね、朝、頭、はねてたら1回ちょっと直してね」

(朝／髪／直す／)

Aさん：(床屋／とこや(指文字)／)

W職員：「うん。」…⑬-4

Aさん：(PT 1／休み／床屋／行く／髪／切る／)

W職員：「いつ？」

Aさん：(とこや(指文字))

W職員：[ホワイトボードに書くようお願いする。]

…⑭

Aさん：[「床屋」と書いて指文字で「とこや」と表す。]

W職員：「うん。」

[ホワイトボードに「いつ？」と書いて見せる。]…⑭-2

Aさん：(分からない)

W職員：「分からない」(分からない)

「今もちょっとはねてるよ」(PT 2／髪／)

Aさん：(くし／家／ない／家／ない／)

W職員：「え、ないの？」(ない)

Aさん：(くし／ない／PT 1／)

W職員：「ないの？」(ない)

「そしたら……」

[ホワイトボードに書く]…⑭-3

「水付けて……」

Aさん：(水／すくう／頭／ぼん／ぼん／)

W職員：「そうそう」(そうそう)

「それだけでも直るから明日からやっ。」

(ぼん／ぼん／直す／明日／)

Aさん：(くしで髪をとかす)

W職員：「本当はそれが……」(PT 2)

[ホワイトボードに書く]…⑮-4

「くし、これがないでしょ？」(PT 3(ホワイトボードの文字)／ない／)

Aさん：(家／ない／ない／)

W職員：[ホワイトボードに書こうとするがやめる]

「1本もないの？」(1／ない／)

Aさん：(母／父／借りる／もらう／使う／分かる／)

W職員：「そうね……くし買おうかな」

[ホワイトボードに書こうとしながら言う]

[ホワイトボードに書く]…⑮-5

Aさん：(PT 3(ホワイトボードの文字)／1／家／ある／母／父／借りる／もらう／いい／)

W職員：「それでも大丈夫」(大丈夫)

「明日から寝ぐせちょっと直してね」

(明日／髪／直す／)

Aさん：(くしで髪をとかす)

W職員：「OK？」(OK)

Aさん：(OK)

図8 W職員との面談場面でのかかわりにおいて

結果的には話が通じているようであったが、途中会話を追っていくと、その場できちんと理解できていないことが窺えた。W職員はAさんが紙の内容を見ている途中から話し始めており、AさんがW職員を見ている。そのため、【視線を合わせる】もしくは【相手が自分を見るまで待つ】という行動がまずは必要になるのではないかと考えられた。

⑬にて、W職員も手話を使っていたが、途中から紙に書かれてある内容を指さして内容を音声で述べていた(⑭)。そして、Aさんは手話で(髪／床屋)という内容を表現していた。このことから、Aさんは文字や文章の内容を理解するのが苦手であるため、⑭の内容がAさんに伝わっていない可能性が考えられた。また、⑬-2にて、W職員は「昨日は？」と問いかけていたことから、Aさんの発言内容(手話)がW職員に伝わっていないことが窺えた。⑮の行動をW職員が発するまで、AさんとW職員の会話は噛み合っていないようであった。しかし、AさんはW職員に通じていなくても手話表出を止めないことから、他者視点の獲得が不十分であるために、話している内容に聞き手が知らない情報が前置きなく発せられたり、不適切に話速が速すぎたりするなど、相手に合わせた表出にならないために支援者側が読み取れなくなる可能性が考えられた。そのような会話の中で、⑮-4にてW職員が

「うん。」と反応していた。内容が分からなくても、一部が分かった（「とこや」という指文字が読み取れた）ため、頷くことで、分かったということ伝えようとしていたことが考えられた。その後もW職員とAさんの会話が噛み合っていないように見受けられ、聾重複者利用者の手話表出が続いて一方的なやりとりになってしまっているような感じになっている。しかし、支援者側が、短い反応ではあるが、「うん。」という反応を数回出すといった【反応を伝える】ことをすることで、Aさんは受けとめてもらえたという思いがAさんの中に芽生えたかもしれない。それによって、Aさんは支援者がホワイトボードに書いてというお願いを受け入れたということが考えられた。

5 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、知的障害者施設における聾重複者利用者と施設職員との間にどのようなコミュニケーション状況が展開されているのかを把握するとともに、聾重複者へのコミュニケーション支援における施設職員のかかわり方を明らかにした。

エピソード1、エピソード2、エピソード3、エピソード4から、【対人距離の調整をする】【特定のものを見るように促す（具体物・具体的な人物への指さし）】といった非言語的手段を活用することによって、相互注視等の相互行為が芽生え、ミスコミュニケーションの修復ができ、対話的な情報伝達がされる等、コミュニケーションが促進されたことが考えられよう。エピソード8では、【視線を合わせる】もしくは【相手が見るまで待つ】といった行動が支援者側になかったこともあり、コミュニケーションが成立していなかったようであった。しかし、「うん」という反応をすることでいった【反応を伝える】行為で、別のコミュニケーション手段（この場合はホワイトボードに書くという手段であった）も利用してやりとりするといった相互行為に繋がっていったことも考えられよう。

手話による言語的コミュニケーションや言語的理解のスキルが不十分な中で、聾重複者を支援することも必要になる。そのような状況においての一つ一つのかかわり方が、聾重複者のサポートになるかどうか検討することが支援する側には求められるといえよう。本研究で抽出されたエピソードは言語的コミュニケー

ションが不十分だからこそ、非言語的手段を活用することで、「人は交流できる存在である」「表現すれば呼応する対象がある」（並木（福田）・横山・西沢・山口・村瀬，2000）ということが窺える事例であったと考えられよう。

その一方で、コミュニケーションがされていない状況のエピソードもみられた。コミュニケーションがされていない各場面にみられる共通点として、「指示をするとき聾重複者利用者の方を見ていない」「1対多数の場合における指示の仕方が分からない」ということが考えられた。手話等による会話や指さしを付けても相手が見ていなければ指示や会話の内容が聾重複者本人に伝わらない可能性がある。エピソード5、エピソード6、エピソード7は集団の中における聾重複者へのかかわりの難しさが表れている事例であった。

一般的に聴覚障害者は集団コミュニケーション等の活動に参加するのは難しいと言われている。聾重複者も例外ではない。しかし、聞こえないから周りの状況が分からないのではなく、聾重複者一人ひとりにあったコミュニケーション手段で社会的孤立が生じないようなかかわり方を考えなければならない。本研究からはその手立てについては明らかにされなかった。今後は、集団の中でのコミュニケーション支援に焦点をおいて検討することが求められよう。

付記

厚生労働省平成30年度障害者福祉総合推進事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」の調査Hの結果を、群馬大学教育学部障害児教育専攻卒業論文「聴覚障害と知的障害を併せ有する重複障害児者のかかわり手としての専門性に関する分析」として提出しました。それらの結果データを2019年度日本財団助成「学術手話通訳に対応した専門支援者育成」事業として、更に分析加筆しました。本研究にご協力いただきました方々に感謝の意を記します。

参考文献

甲斐更紗・金澤貴之・二神麗子・吉村京子・木村素子（2020）ろう重複障害者へのコミュニケーション支援の実態について—相談支援専門員の手話スキルに関する視点からの分析—。群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編，69，139-148（投稿中）。

並木（福田）桂・横山公美子・西沢啓子・山口慎一・村瀬嘉代
子（2000）聴覚障害者に対する統合的アプローチ. 明治安田
こころの健康財団研究助成論文, 36, 119-128.
日本の聴覚障害教育構想プロジェクト委員会（2005）日本の聴
覚障害教育構想プロジェクト最終報告書.（財）全日本ろう

あ連盟／ろう教育の明日を考える連絡協議会.
山口慎一（2005）ろう重複障害者への心理的援助について—ろう
重複障害者施設「ふれあいの里・どんぐり」における実践か
ら—, 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 41, 43-52.

（はしもと あかね・かい さらさ・よしむら きょうこ・
ふたがみ れいこ・きむら もとこ・かなざわ たかゆき）

